

ます。心を安靜にもつといふ事は、病氣治療の上によほど大切な事でありませう。

醫者の種類も平生真面目に研究しておいて、一旦其人と定めたならば、安心してその人に絶體の信任をおくのがよいやうです。醫者の方から云つ

少年俳人

我と來て遊べや親のない雀

は大俳人一茶が六歳の彌太郎の時の吟咏である。

一茶の句に就いては先年倉橋氏が本誌に精しく述べられた通りである。

兒童の藝術と云ふ問題は素より其範圍が甚だ廣い。今は俳句にこの問題を限つて、一切學問上の詮義立は抜きにして我邦の少年俳人の面白い作を少しばかり紹介して見たいと思ふ。

犬と猿世の中よかれ酉の年

ても、全然信任せられて、生死ともに任せるといはれた時は最苦しい。如何なるものを犠牲に供してもなほさなくてはならぬと思ひます。そして、多くは其方が成績がよいやうです。

若き父

は芭蕉が十四歳の時の作である。

井の端の櫻あぶなし酒の酔

は誰知らぬ人のない十三歳の時の秋色女の吟であり。

雪の朝二の字／＼の下駄の跡

が捨世六歳の時の作である事を思へば詩才遙かに秋色を凌いだ事が明かである。

發句して笑はれにける今日の月

は蕉門の丈草が九歳の句である。

来い〜と言へど螢は飛んで行く

は鬼貫の八歳の傑作で、この人の風格を子供の時からしのばせる。

正月が来たうま〜をおれも喰はう

は也有が唯一の門人たる晋路が二歳の時の作である。但しこれは註釋が要る。『今年(明和五年)戊子の元旦、晋に對して正月が来たぞよ、歳旦の句せぬかと戯れければ、晋路「正月が来た」と云ふ所へ雜煮をすゑければ、晋路「うま〜をおれも喰を」と云ふ。彼が詞を筆にうつして之を見れば……』と有也の俳友堀田六林の日記に出て居る。

凡董の門人、京の大丸の分家下村春坡と云ふ人の長子に米松(長じて春花と號した人、二十五歳で歿した)と云ふ子供があつた。

竹の子やとらずに置けば竹になる

は其八歳の時の名吟である。猶この少年には

鶯や鳥屋の裏に鳴いて居る

萬歳に初めて來たり隣の子

こちを見て餘所にもあがる いかのほり 風

この句があつた。嘗て江戸へ赴く父の首途を見送つて、

不二の山遠く見えてもねきにあり

同じ凡董門人の山田之兮の子も句を咏み、且つ

同じ少年俳人米松と句をやりとりをして居る。

あの梅の咲いたは乳母の在所哉 之兮男七歳 龜 兮

鳥追や貌かほ観かる、女聲 同

うれしさよ梅見る人の數へ入る 同

初午やどこへ行つても小豆飯 同

五六町野道いづれば鐘かすむ 春坡男 同

萬歳や酒もよくなる餅くらひ 松 鳥

よくあげておとなの渡す いかのほり 風 同

切風きかぜに追ひつきかぬるちまた哉 車 容

春駒や深く乗込む臺所 同

「父君の東へ下り給ふ後米松子の許へ遣はず」とて

留主の戸やおとづれ薫る冬の梅 之兮男 龜 兮

春と土産をまつ松の宿 春坡男 末 松

これから句集の中からいろいろ取り出して御見
にかける。先づ、お茶の水の幼稚園の藤棚に因ん
で、「太夫櫻」(延寶八年)の中から、

見に行くや長の道筋藤の花 七歳 き く

去來が妹千代を伴ふて伊勢參宮をした時の「伊
勢紀行」(貞享二年)から、十三歳の少女詩人の作
を紹介する。

伊勢迄のよき道づれよ今朝の雁

八月や矢橋へ渡る人とめん

霧よりはこなたへ廣し鴉にまの海

長き夜も旅草くたび臥に寐られけり

秋の夜も寐ならふ旅の宿り哉

小鳥さへ渡らぬ程の深山かな

萩すゝき山路を出づる笠おもし

泊りくゝ稻する唄もかはりけり

芝草の露もかちぬる育ちかな

曉の三日月見たる途すから

水むすぶ手ぬぐふばかり秋の風

見るくゝも帆數云ひけり霧の海

「續虚栗」(貞享四年)の千子の

大内の飾り拜まん星祭り

は人の好く知つて居る句である、

大淀三千風の記行「日本行脚文集」(文祿二年)よ

り

三千風の句は早咲のかをり哉 十一歳 小柳

夕ぐれは何國いづこの鳴が味あじかりし 淨林子息 友巳

鹿か轟こすがた四方の落穂おとしに肥ええりし 同二子 吟松

五十路して知るや故郷の秋の暮 同三子 椿葉

日本やまとめぐり異國は秋の寢覺ねざめにぞ 淨園子息 左柳

看荒しぬ菅笠はたゝ秋の風 同二子 素柳

蟬々となく拔殻はくがらはからくゝと 左柳子息 富柳

絲柳いといろはにほそきみちの風 同二子 一柳

みち風の秋の草の霜さらし 名村子 玉正

面白や歌も發句はくに歸り花 高妙古要 勝女

茶ちやに寄せて胡瓜こくわを譽ほめる休やすみ哉 四宮氏 素林

坊ぼくさまに連れ行く梅うめも東風こちから 八歳 二水

春の行く草鞋跡見ん天津道子 矢吹氏 息 常也

「其袋」(元祿三年)より

鶯や手習の窓おもしろき十一歳調武子

日ぐらしの聲ぞ涙の親の里少 年 彌五郎

「猿蓑」(元祿四年)より

七夕やあまり急がば轉ぶべし 伊賀少年 杜 若

「卯辰集」(元祿四年)より

藪の中の薺ぢぢなは人にあはぬなり(牧童の 女) けん

絲きれて紙鳶は白根を行方哉 山中少人 桃 葉

此は扱行けどもく花の山 松任十歳 春 之

根ながらや櫻のせ行く渡し舟少 年 桃 英

牡丹散り芍薬開くあまた且かな少 人 桃 英

夕暮や早稻立ちのびて人見サ七尾少人 松 鶴

高燈籠松の木の間に見ゆる哉 九 歳 長 皿

南天の枝にうつらふ月夜哉 五 歳 長 皿

「併諸袋」(元祿四年)より

未明あけがたの曇りを春の形哉 十一歳 金 鈴

「有磯海」(元祿八年)より

嵐山猿のつら打つ栗のいが野明息 十一歳 小五郎

花散りて二日をうれぬ野原哉嵯峨農市 十二歳

「錦繡綴」(元祿十年)より

小僧ども庭に出でけり芥子坊主少 年 角 上

英國の幼稚園研究(つらき)

|| (マレー氏による) ||

紹介生

英國の幼稚園は極く初期から小學校の課程の不
足を補ふことに努めてゐた。幼稚園の主眼として

ゐるものは常に子供そのものであつた、子供の自
然の發達及び子供の然自の元氣であつた、故に幼